

戒厳令を逆手に執る革命原理

近 藤 眞 男

目 次

- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 一 はじめに | 六 |
| 二 北一輝の革命原理 | ワイマール体制の崩壊 |
| 三 陸軍を主体とするクー・デ・ター策謀 | 七 軍隊楨杆の革命原理の限界 |
| 四 非常大権発動への憲法学的構造 | 八 国際環境と革命原理 |
| 五 戒厳の法、国家哲学的根拠 | 九 戒厳令手段として二・二六事件の場合に見る矛盾 |
| | 一〇 現行憲法の欠陥、戒厳令の欠除 |

一 はじめに

「戒厳令」を逆手に報る革命理論は「革命」のまっとうな実現でなく「革命」を鎮圧する手段を逆手にこれに上乘せしめて一挙目的を遂げるを云う。謂う所、北一輝のそれが理論めいたものであるが橋本欣五郎の「錦旗革命」もこれに類するものであり三月事件十月事件はこうした未発の軍部クー・デ・ターであり近代革命は何れもこうした国家権力の非常手段を前提としている。旧憲法では第一四条に戒厳規定があり別に第三一条に非常大権という前者と競合するあり君主大権の下に非常事態に処する途があつたが現行憲法では緊急事態に処する途なく拱手傍観の形であるが

一方対処超法的に何にでも可能であることを示唆している。これは法治体制の破壊であり非法法的前提であり現行秩序の否定を包含するものである。即ち現行憲法はそれ自体が破壊に繋る致命的欠陥を包蔵している。

かかる暴挙の背景として一九三〇年代の内外の Schwancken に一瞥せねばならない。それは国際的緊張が国歩艱難を生じ、人心を倦ましめた議會政治の行き詰まりが荒療治を要請した。その呼応一に政治の turning point に在ったからである。一溪の窮まる所一溪生ずでその屈節既に非常時である。そうした起動力を私はコミンタンの運動に見る。その暴力世界革命の方図がフワシズムの傾向を西に東に生んだのだ。即ち共産主義運動に対するのにはこの体制が手っとり早いからである。或いはその防遏これより能率好きはない。三〇年代の動揺の元凶は実に共産主義運動である。かくして左翼運動弾圧は当局の好意の下に右翼青年将校運動を醸盛した。青年の社会正義が市民教育ではマルクス・ボーイを作ると同時に軍隊教育では右翼青年を作った。士官学校や兵学校での教育は社会科学的訓練に熟せず未熟なる陶冶は直接行動の徒を醸したのである。

注

① I. L. Morris *Nationalism and The Right Wing in Japan*, Oxford University press, 1960, p. XX.

② *ibid.*, p. XXV.

軍隊教育の右翼運動は幕僚フワシと青年将校運動に区別するを要する。共に同根であるが後者は前者をダラ幹呼ばわりし、前者は後者の輕拳盲動を戒めた。共に政治運動であるが前者の「黒い霧」に対して後後者な「白い霧」か。

注

① 昭和四〇・三、みすず書房刊、今井高橋編『現代史資料(4)国家主義運動』四八一頁。

客観国際、国内情勢かくの如きであるが、北一輝、大川周明、橋本欣五郎、陸軍中央部の小磯以下の主観性、亦忽に出来ない。この連中は機が熟したと見るより、personalに革命が面白く面白く連中である。歴史の転廻に唯物史観等は客観的条件の分析に厳しいが個人の側の一回性、特殊性亦大いに与って力あるものである。新カント学派の史観、それに精彩あるが我々はランケ以来の高遠な理想主義史観に同調するものである。personalに急なる余りは御殿女中式の策謀に興が惹かれるるの弱点あるもこう云ったひそみ^①を逸するは唯物史観学派の弊である。

注

① 昭和一九二一、改造社刊、西田直二郎著『日本文化史々論』一九頁

とまれ左翼旋風に処するにはフワッシヨ情勢以外に手がなく自由主義デモクラシーでは「自由」すら否定される。デモクラシーを否定する論理にはデモクラシーで対処出来ない。暴力を否定する前に自滅があるからである。三月事件に始まる右翼運動にはこの前提が看過されてはならない。北、大川の体質と云えこうした社会基礎なくては彼らの熱ソバイ運動は燃えない。

最後に「陸軍」が改造運動の母胎にどうしてなったか？ 革命はその構造既に全体主義的であって、上に対する責任、下に臨む権威で横杆が貫かれる。一九三〇年代の国際的行き詰まりに在って焦燥、今にして国防国家態勢を樹立せずんば米ソに後れを執るの、夜郎自大の使命感があった。事実満蒙の既成権益は中国の民族主義運動と俟って輻の急になったのである。ono amonoが乃公起たずんばの倫理意識に魁がけられて国民の指導に乗り出した。「パンフレット事件」のように稚拙な独善主義が罷り通った。これが著しく政治色を帯びたのに「国体明徴運動」^②が今在する。民間有志が陸軍をたきつけ、陸軍亦無責任なこの種の圧力団体を利用する。次乗、幕々の相乗作用である。

注

- ① 昭和四〇・三、みすず書房刊、今村高橋編現代史資料(4)国家主義運動(1)一四二頁
 ② 同三五五頁

二 北一輝の革命原理

北一輝革命原理はその『日本改造法案大綱』で露骨に表現されている。その巻一が「国民ノ天皇」であるがそこで冒頭に謳い上げるのは「憲法停止」手段としての「戒嚴令」である。即ち「天皇大権ノ発動ニヨリテ三年間憲法の停止シ兩院ヲ解散シ全国ニ戒嚴令ヲ布ク」とある。謂う処法律用語の要件と効果に訴うるものであり素朴な表現であるが意図を髣髴し得る。

注

- ① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著『北一輝著作集第二卷日本改造法案大綱』三七一頁

明治憲法下では天皇大権は問答無用の大上段であり第八条、九条、一〇条、一一條、一二條、一三條、一四條以下七〇條と勅令、軍令を公布し得、第一四條戒嚴の如きは憲法以前の規定であり法律事項に下駄を預ける如きも憲法以前が曲物で超法的にビシビシ処分し得るものである。憲法以前と云うのは「臨戦地区」「合囲地区」と西南の変以来の内乱に予想して応變の規定であったからである。かかる問答無用の衰竜の裡に隠れた暴圧手段であるが議会の解散へと長弁とサロンを排し独裁に出づるものである。その場合に大権の輔導機関である「枢密院」すら封ずるのである。

北一輝の天皇観は一種の「君主機関説」^②であるがこの辺が上杉愼吉とも容れない旧時代から言えば治安維持法の対象ともなるべき不逞なものと目されるであらう。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二巻『日本改造法案大綱』三七二頁

② 同第一巻『国体論及び純正社会主義』二二一頁

彼のホンネとする処、『国民ガ本隊ニシテ天皇ガ号令者ナル所以、権力濫用ノ「クーデター」ニ非ズシテ国民ト共ニ国家ノ意志ヲ発動スル所以』にある通り、天皇大権をダシにする政権奪取である。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著『北一輝著作集第二巻日本改造法案大綱』三七八頁

これは現時左翼政党が国家の武装を否定しないのと同断で「クーデターヲ保守専制ノ為メノ権力濫用ト速断スル者ハ歴史ヲ無視スル者ナリ。奈翁ガ保守的分子ト妥協セザリシ純革命的時代ニ於テクーデターハ議會ト新聞ノ大多数が王朝政治ヲ復活セントスル分子ニ満チタルヲ以テ革命遂行の唯一道程トシテ行ヒタルモノ。又現時露国革命ニ於テレーニンガ機関銃ヲ向ケテ妨害的勢力ノ充満スル議會ヲ解散シタル事例ニ見ルモクーデターヲ保安的権力者ノ所為ト考フルハ甚シキ俗見ナリ。また「クーデター」ハ国家権力即チ社会意志ノ直接的発動ト見ルベシ。ソノ進歩的ナルモノニ就キテ見ルモ国民ノ団集ソノモノニ現ハルコトアリ。日本ノ改造ニ於テ必ズ国民ノ団集ト元首トノ合体ニヨル権力発動タラザルベカラズ」の如キ一君万民共産政治を謳い上げヤミクモに権力奪取を目論むものである。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著『北一輝著作集第二巻日本改造法案大綱』三七一一二頁

北一輝に於いては *coup d'État* は天来の響きでその *parliamentalism* を認識するの思想も尤ものであるが「議會」は饒舌と無能との代表と写り銃撃に依る潜伏を庶幾しているのである。かくして天皇と軍隊とは革命の手頃の小道具となり後年の二、二六を暗示している。恃むべきは天皇と軍隊なのだ。このことは『支那革命外史』^①からも読みとられる。

注

- ① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二巻『支那革命外史・国家改造案原理大綱日本改造法案大綱』四二五頁

それは『軍人勅諭』に代表される『天皇ノ軍隊』に秘鍵があるべく意識する国民軍では利用価値は薄く『帝国憲法』第一条、一二条に云う体制こそ恰好なのである。如何となれば「軍令ノ承行」こそ急転直下その鎖鑰を握るものだからである。謂う所正しくプロイセン型軍隊であったのである。彼に在ってはこの政治家にして「政治」は巾櫛^①者流の亜流であり「武刃」こそ男子の本懐と写ったものであろう。即ち操觚にしても利鏃以て壁面に彫る文字こそ武人の文章としたのである。一輝の自負、本領はここに在る。

注

- ① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二集『日本改造法案』二九二頁

近代憲法は「民政の参画」をひとつの原理としている。神権にしる、君主主権にしる、方法の欽定にしる「民意の暢達」は他の一本の柱である。北一輝に於いてはここにも欠缺なく帝国議會を超えるものとして或いは枢密院に代るものとして「顧問院」の設置を訴えている。即チ「天皇ヲ補佐スベキ顧問院ヲ設ク。顧問院議員ハ天皇ニ任命セラレ其

ノ人員ヲ五十名トス・顧問院議員ハ内閣會議ノ決議及議會ノ不信任決議ニ對シテ天皇ニ辭表ヲ捧呈スベシ。但シ内閣及議會ニ對シテ責任ヲ負フモノニアラズ」と。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三七二頁

謂う処、帝國議會の存続は認めるもので樞密院の動脈硬化密室化を否定するもので生新なる所見であるが一に天皇任命が誰が責任を有つのか、二に内閣、議會に責任を負うものでない旨、闕下答責は單に名義上のもので実質を伴わない。一輝曰く「顧問院議員ガ内閣又ハ議會ノ決議ニヨリテ彈劾セラルル制度ノ必要ハ、天皇ノ補佐ヲ任トスル理由ニヨリテ專恣ヲ働ク者多キハ現状ニ鑑ミテナリ。樞密院諸氏ノ頑迷ト專恣トハ革命時ノ露國宮廷ト大差ナシ。天皇ヲ累スルモノハ凡テ此ノ徒ナリ」と。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三七四頁

内閣・議會の「彈劾權」はこの制度に依り顧問院議員の責任を帰趨に迷わしめるがこの辺は一輝の憲法・行政法上の知識の欠陥に依るものであり彼が着想の徒であり専門家でないことを思わしめる。要するに『改造法案』の「顧問院議員ハ……」は矛盾撞着に充ちている。華族制度、貴族院の廃止にしても革命、戒嚴令に繋るも社会主義と權威主義の synchronism である。又、彼の槍玉に挙がるものは文官任用令、治安警察法、新聞紙条例、出版法等山県を頂点とする明治憲法の守旧派の最も擁護する所であった。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三七七頁

戒嚴令下、改造内閣員は革命政府のカルノー以下の権限を有つものの如きであるがこれがメンバーを「偉器」とするもこの選任はク・デ・ター参加者でないか。この辺の見解にも粗策を見る。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三七七頁

「戒嚴」とは明治憲法に云う第三十一条非常大権であつてこれが抵触は一輝は專擅の排除と措定しているのであつて「死刑」を以て報いている。憲法規定で第一四条規定と第三十一条は競合するか否か行政法上の議論があつたが一刀兩断的には判じ難い。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三八一頁

「戒嚴」中一輝は『在郷軍人団會議』^①を以て改造内閣の直屬機関としその意見を戒嚴推進中の槓杆としているがその権限について蔽密に触れていない。これ一輝の着想らしい項であるが兵役服務者在郷軍人については戦時中『勲族』の社会身分的措施がときの内閣でマジメに論ぜられた。

注

① 昭和三四・七、みずず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三八三頁

その傾倒に曰く^①「在郷軍人ハ嘗テ兵役ニ服シタル点ニ於イテ国民タル義務ヲ最モ多大ニ尽シタルノミナラズ其ノ間ノ愛國的常識ハ国民ノ完全ナル中堅タリ得ベシ。且其ノ大多数ハ農民ト労働者ナルガ故ニ同時ニ国家ノ健全ナル労働階級ナリ。而シテ既ニ一糸素レザル組織アルガ故ニ改造ノ断行ニ於イテ露独ニ見ル騒乱ナク瞬ニ日本ノミ専ラニスベ

キ天祐ナリ」と。これは素朴なる農民兵が軍隊教育を支持し二・二六事件当時も生硬な青年将校の革命運動に乖離しなかったのと同断である。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三八四頁

② 一九六七、三、柏書房刊、大谷敬二郎著『二・二六事件の謎』一五六頁

つまり学校教育と並び青年時の軍隊教育が皇民を培い良兵良民の思想である。これは当時の青年学校の思想でもあり又軍当局のオーソライズするものであり配属将校が一般教育にも進出した過程である。極言すれば陸軍が帝国の教育を統制した過程である。一輝はこの *Narhoden* に期待した。従って彼に於いては兵役は名譽ある国民の権利であると強調する。而して階級章以外に不平等を排している。ジャン・ジョレスの『新しき軍隊』が理想か。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三三八頁

それは結局既成の御用団体^①「帝国在郷軍人会」を排するのである。「在郷軍人会」は存在生誕の意義あるものの如きも戒嚴中の職務遂行については相応しくないと見たのである。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一郎著、北一郎著作集第二卷『日本改造法案大綱』三三八頁

「帝国在郷軍人会」は明治四三(1910)年以来存在したが、それは反共同体として天皇制擁護機関として卓効があったので一輝のように彼流の「天皇機関説」或いは米騒動以来の反動団体の性格に一国社会主義の北理論に矛盾する所もあったが、組織の利用として著目の要あったのである。従って彼には「徴兵制」は帝国憲法の国民の義務の二大柱

①で「徴兵猶余、一年志願兵」制度は指弾さるべきものである。要するに「精兵純血主義」が彼の主張であり、これによるクーデターの支持を訴えるものの如きである。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三八五頁
彼一輝の「戒嚴」発動に移行する帝國憲法の運用は國際的に見て「革命権」の主張と裏腹である。これは『改造法案大綱』巻八「国家ノ権利」に謳うもので曰く「国家ハ自己防衛ノ外ニ不義ノ圧力ニ抑圧サル、他ノ国家又ハ民族ノ為メニ戦争ヲ開始スル権制ヲ有ス。則チ如斯ク当面ノ現実問題トシテ印度ノ独立及ビ支那ノ保全ノ為メニ開戦スル如キハ国家ノ権利ナリ」と。これは孟子の「暴君放伐説」monarchomacosの思想である。「聞誅一夫紂矣、未聞弑君也」を周延したものである。

注

① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三四二頁
② 昭和四二・一一、明治書院刊、内野編『解釈漢文大系(4)孟子』六六頁
大東亜戦はこれを行つたが当時の指導者は「革命権」を自認していなかったが政治学的にはこれで而もこれは「同類意識」の援助ストライキの左翼理論である。その国家社会主義の Standpunkt は在郷軍人団を私^①有財産限度調査執行機関に当らしめロシヤ革命の Совет солдаты の任に髣髴ならしむるものがある。

注

- ① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』三八四頁
② 正式名称 советы рабочих и солдатских депутатов, A. M. Прохоров, Большая Советская Энциклопедия 24, С. Т. Р. 50.

三 陸軍を主体とするクー・デ・ター策謀

北一輝は戒嚴令を逆手に執る一挙クー・デ・ターを理論つけたがこれが包蔵されたのは大正八年頃の醸成で上海で脱稿の騰写刷りが介在するが爾後のクー・デ・ターは本書の影響もあり何れもこの荒療治を策している。^②

注

- ① 昭和三四・七、みすず書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『日本改造法案大綱』四一〇頁
② 昭和四〇・三、みすず書房刊、高橋編『現代史資料(4)』四二頁

大正八年上海では大川との出会いがあり大川の鞠躬如たる弟子の礼があるがこの折の北の思想が熟成して大川のクーデター計画となったものと思われる。それは具体的には「三月事件」であるが右翼デモと議会の占領、警官との衝突で軍隊の出動となり戒嚴令→革命成就というスケジュールであった。ときに昭和六年(1931)。

三月事件の発端を見るにはその背景「桜会」の存在を認識せねばならない。これは昭和五年九月末の組織化であるがロンドン条約統帥権干犯の政治紛擾が背景である。桜会の発起人幹部は参謀本部橋本欣五郎中佐陸軍省坂田歩中佐、警備司令部樋口歩中佐であるが何れも直情、政治将校である。この中リードしたのは参本二部の班長橋本で彼のイデオロギーは駐在武官来の終始トルコのケマルのそれであった。ケマルの第一次大戦屈辱後のトルコの行き方に傾倒したのである。

「三月事件」の首謀者は大川周明である。折からの政党政治の腐敗、ロンドン条約の失敗に業を煮やし陸軍側に在

って寧ろ「乃公起たずんば」の認識に迫られたが橋本中佐同じく参本の支那課長重藤大佐、第二部長建川少将参謀次長の二宮中将軍務局長小磯国昭少将が謀議関与し宇垣を総帥に担ぎ革命運動の機が熟したと見た。而して陸軍首脳部以外に民間では大川の他に大川と親しい徳川義親候がいる。右の傘下として右翼団体が介入し清水行之助左翼の赤松克麿と顔触れは華やかで擬砲弾で景気を添え紛擾を起す計画三月廿日が実行の機 D・day であった。方法として大衆動員、議会の包囲であるが起動力として北九州の暴徒を備ったのである。清水行之助が暴動隊長である。彼は五、〇〇〇人を目睹として日比谷公会堂のボクシング大会を利用して、議会が大変だと叫ばしめ銀座神田からの暴徒と合流せしめ群集心理に乗って弥次馬を糾合し戒嚴令に「あぶり出す」という方式であった。

注

① 昭和五四・七、サンケイ出版刊、矢次一夫著『政変昭和秘史(上)』五一頁

別に無産三派の暴動計画というのがあるがそれは赤松の社会民衆党と麻生の日本労働党大山郁夫の労働党を指す。^①この三派の中で事体を目論んだのは赤松と亀井貫一郎という。この大会は芝協商会館でこの集合を起動力として擾乱に移そうと云うのである。これは警視庁の大検挙で混乱の裡に推移した。

注

① 昭和五四・七、サンケイ出版刊、矢次一夫著『政変昭和秘史(上)』五二頁

とどのつまり三月事件は挫折したのだが、大川と橋本との紛れもあり清水の計画も杜撰なものである。徳川の資金供与も当時のカネで五〇万円と莫大であるが基底は陸軍の変節、宇垣の投げ出しである。宇垣は水ゴロ魚ゴロを示すが如く示さざる如くタヌキを規めこんだが『宇垣日記』^①では巧にカワしている。三月事件は宇垣が颱風の眼であ

るが彼が腰を据えて動かないから挫折したのだというのが本命であろう。クー・デ・ター謀議と雖も personality に左右されると云うものである。

注

① 昭和二九・八、朝日新聞社刊、宇垣一成著『宇垣日記』一五七頁

クー・デ・ターに爆弾つまり擬砲弾が攪乱に一役任ずるのだがこれの出所については千葉歩兵学校であり建川等が責任者となり参謀本部へ運ばれたのであり三月事件は陸軍総ぐるみであり大川が楨杆であった。矢次の表現に依れば慶安^①の昔、由比正雪が紀州大納言を擁して革命を計ったのと髣髴、つまり現レジームを容認の上自己目的を遂げる処から「戒厳令」クー・デ・ターと同断である。

注

① 昭和五四・七、サンケイ出版刊、矢次一夫著『政変昭和秘史(上)』五八頁

宇垣は政治性もあり大器であったがこの背反・躊躇が後年の陸軍を挙げての総スカン、軍縮の幟と共にシッペイ返して酬いられた。組閣を阻んで憲法司令官中島今朝吾が「待った」を懸けたのは余りに有名である。

三月事件の直後は九、一八満州事変であるが大川は橋本は生懲りもなく一〇月事件、錦旗革命を目論む。これは満州事件と表裏しているが田中清少佐のメモに依れば橋本の幟と言う「本年九月中旬の〇〇を契機とし根本的変改を敢行せらるべきなり云々。而も国内改造問題は参謀本部主脳部には十分諒解あり」而も云う「斯くの如きを以て軍部に政権の来るべし、軍部が中心となり政権奪取の為計画案を九月初旬までに作成せられ度し」と。云う処クー・データー成就、戒厳令を手段とするものの如く〇〇とあるは九、一八の柳条溝事件を企図するものの如きである。

注

① 昭和四〇・三、みすず書房刊、高橋編『現代史資料(4)』六六頁

① 謀議に参加したのは橋本中佐、長少佐、馬奈木大尉と札つきだが一〇月の初中旬議熟し二一日が行動予定の如きであつた。兵力を投入する真のクー・デ・ターであつて近衛、歩三の数ヶ中隊、大川傘下の訥庵もどきの門下生隊海軍将校の抜刀隊援後者下志津より飛行機の参加、首相官邸、警視庁の占拠は二・二六の先蹤計画であつて東郷を擁して参内彼等に大命降下閣僚名簿としては

総理大臣兼陸軍大臣 荒木中將

内務大臣 橋本中佐

外務大臣 建川少將

大蔵大臣 大川周明

警視總監 長少佐

は有名な Karikatur である。

注

① 昭和四〇・三、みすず書房刊、高橋編『現代史資料(4)』六七頁

三月事件と云い一〇月事件と云い軍隊介入の戒嚴宣告政權奪取と云う寸法であるが一〇月事件の当時は陸軍への国民支援が濃厚で彼らは期熟したと見たがこの計画は強行直前一〇月一七日憲兵隊の検査となり橋本、長、田中弥馬奈木は待合から同行せられコワモテの態で軟禁せられた。井上日昭、橋孝三郎の一派待機暴発の機を伺っていたが軍の

挫折と共に怯んだのである。又一〇月事件は民間側有志と大川の軍結託の間に隙を生じ大川、北の反目となりクー・デ・ター計画を陰湿なものにした。ここで当局が断乎たる態度を執れば収局されようが可い加減な処置が災を生んだのである。

四 非常大権発動への憲法学的構造

『帝国憲法』では第三一条がそれでこれは特定の軍令権が非常の場合に臣民の權利義務を破壊することを前提とし兵政分離の近代原則が通らないことである。『帝国憲法』第十四条の「戒嚴」の項は簡に過ぎ万般法令に譲る如きも臨機の処置で独裁に出づることを約している。これが一輝等の乗すべき法の欠陥である。即ち「集會結社ノ自由出版ノ自由、居住移転ノ自由、住所ノ不可侵、所有權ノ不可侵、信書ノ秘密」は法律上効力を失い法律に由らずしてこれらの自由は拘束せられ強制が及ぶ。而も不逞の徒が庶期する処は「緊急勅令ニ依ル戒嚴令ノ施行」で要件の不備の場合も秩序紊亂に兵力の登場を憲法が是認している点である。橋本等の掌を拍って迎へるはこの場合である。

注

① 昭和六・一二、有斐閣刊、美濃部達吉著『憲法提要』五七八頁

これをローマ法に徴するとアラグスツスは国民騷擾時の例外的執政權を獲得しキケロの追認的声明あるが応變の相がある。

注

① 昭和一一・一一岩波書店刊、船田亨二著『羅馬元首政の起源と本質』一八八頁

② Cicero, De Republica de Legibus, Harvard University Press, 1961, p. 409.

抑、この制度は état de siège 及び Belagerungszustand 又は Kriegszustand に発展するもので我が国旧憲法では天皇大権の明文あるが行政権、司法権を揺すぶる処から統帥大権の作用とはかきゆかない運用の欠陥がある。

注

① 昭和二〇・一、有斐閣刊、美濃部達吉著『逐条憲法精神』二八二頁

この場合国務大臣の「副署」が問題となるが我が国の範旧ドイツ帝国憲法第六八条に依れば戒嚴の宣告は元首の大権ではなくして大元帥の大権であることが明示せられ統帥権 Oberbefehlrecht の大元帥主義が貫かれている。我が国のそれはフランス主義とのミックスであるが明治二七年の勅令第一七四条の公布のものは公式令制定以前のもので沿革の不備を露呈している。即ち要件効力は明治一五年八月の太政官布告第三六号戒嚴令がそのまま踏襲せられたのであって旧憲法時代に在っても拡張解釈の余地があった。

注

① 昭和二〇・一、有斐閣刊、美濃部達吉著『逐条憲法精義』二八五頁

五 戒嚴の法国家哲学的根拠

「戒嚴」とは法的秩序を破壊する権力である。その法を破る権力の根拠如何。それが下からの革命権 *Revolution*。

tionsrecht ではなく上からの権力構造に拘わるとき「戒厳」として許容せられる。これシエイエスの逆立ちである。

注

① 昭和三五・二、有斐閣刊、尾高朝雄著『法の窮極に在るもの』八九頁

シエイエスの逆立ちと云うのは *pouvoir constituant* が *pouvoir constitue* に屈従し^①カール・シュミットの *Verfassungsgewalt* に潜伏するからである。^②

注

① 昭和三五・二、有斐閣刊、尾高朝雄著『法の窮極に在るもの』八六頁

② Carl T. Schmidt, *The plough and the Sword*, AMS press, 1966, p. 33.

即ちそれはシエイエスに超越する *outlaw* の許容で「自然法」をも破る *almighty* でワイマール体制をも顛覆した^①あの独裁権力である。

注

① Godfrey Scheele, *The Weimar Republic*, Faber and Faber Limited, p. 156.

帝国憲法も *Staatsnotrecht* を措定しているがこれは法秩序を前提してのことである。従って革命権 *Revolutionrecht* も概念規定が必要であろう。由つてそれは「反体制」という程の粗雑なものではない。憲法の自殺行為であつてはならない。「白虹貫天」式のものであつてはならない。これは畢竟舞文である。憲法保全のため帝国憲法では第二章を停止条件づけるのである。それは「法」に対する「政治」の優先でケルゼン流の純粹法学を排するものである。故に尾高朝雄は「法学に対する政治の優位」^{①②}で位相づけた。

注

- ① 昭和三五・二、有斐閣刊、尾高朝雄著『法の窮極に在るもの』一三八頁
② Hans Kelsen, *Reine Rechtslehre*, Verlag Franz Denicke, 1967, p. 72.

六 ワイマル体制の崩壊

ワイマル体制とはドイツに於ける1919-33の自由主義法下であるが緊急命令権 *Staatsnotrecht* たる第四八条に由りナチスの1933 一月三〇日の *Machtübernahme* を招来したこと夙に知られることである。これは正に政治的には彼の非常大権で戒厳令であったがこれが命取りとなったものである。元来がヒンデンブルクの首相任命権、緊急命令権、議会解散権が作動しブリュニング、パーペン、シュライハーと交迭したが恐慌と共産党の追求とに脅え軍部の支援の下にヒットラーの首相任命となるのである。

注

- ① Godfrey Scheele, *The Weimar Republic*, Faber and Faber Limited, p. 57.

ヒットラーの首相任命はワイマル憲法下多数党の領袖に政権を委ねたのであり合法のものであった。がその実ヒットラーはドイツ国家人民党と連立で組閣したのであった。ヒットラーは「突撃隊」*Sturmabteilung* と親衛隊 *Schutzstaffel* を介して議会主義を否定した。この経緯は大統領との合作で「民族と国家の防衛」^①のための名の下に国会放火事件等共産党退治に向けられていた。つまり厳密に法制的には「戒厳令」権援用以前で最早内戦の直接行動で

ある。

注

① 一九八〇、一一、岩波書店刊、ハルトウング著、成瀬浩訳『ドイツ国制史』四七四頁

ナチスの独裁は1933三月二三日の全権委任法 *Ermächtigungsgesetz* に伝って創出されている。かくして *Länder* は統合され諸邦高権 *Länderhoheitsrecht* は樹立され1871の革命に次ぐ統一国家成った。そこへ起きたのが1934八月五日のヒンデンブルクの死である。そこで名実共にヒットラー政権成った。

七 軍隊楨杆の革命原理の限界

ナチスは合法性の衣を纏った。北の革命原理も要するに『帝国憲法』遵守の上に合法を装って一挙革命の外廓に迫るものである。その運動の楨杆に軍隊の素朴性を援用し青年将校運動を利用した。橋本欣五郎は陸軍自らの本能、機動性^①を利用しようとした。何れも軍隊運動を必須としている。この合法、非合法の *Grenzgebiet* を逸して大憲破壊、*Bolshevismus* を志したもののレーニンがある。北一輝はレーニン和尚と称して彼を貶するが如く実は尊敬しているが啊^②。呟の呼吸の間を見るべきである。北の『改造法案』の執筆に在ってはレーニンの運動指導が去来していたに違いない。

注

① A. M. Прохоров, *Большая Советская Энциклопедия* 3, издательство «Советская энциклопедия», 1970, стр. 532.

戒嚴令を逆手に執る革命原理（近藤）

② 昭和三四・七、みずす書房刊、北一輝著、北一輝著作集第二卷『国家改造案原理大綱』二六二頁

ロシア革命は二月革命と一〇月革命との二段革命であるがケレンスキー臨時政府は1917以降^①、Большевикиの軍隊内に於ける破壊活動に対抗するためには社会革命党を中心にした臨時政府は愈々、右傾化し貴族、軍閥、官僚、ブルジョアに頼らざるを得なくなった自己矛盾を包蔵したのである。これ北一輝の幕僚フワシヨ勢力を避け、Народники 青年将校運動に提携した所以である。

注

① 名世界思想社刊、猪木正道著『新版ロシア革命史』一六五頁

② А. М. Прохоров, Большая Советская энциклопедия^① 17, издательство «Советская энциклопедия», 1974, стр. 262.

元来軍隊、警察はその機動性を尊重しながら命令系統の遵守と云う硬直した機関である。これ帰結的には「人民蜂起」という大衆革命運動に移行するのである。これ^①БольшевикиのМеньшевикиに勝った所以である。それは軍隊内に叛乱^②、抗命を起こさせる暴動でオーロラで火蓋を切られた軍事委員会のБольшевикиの作戦である。

注

① А. М. Прохоров, Большая Советская энциклопедия 3, издательство «Советская энциклопедия», 1976, стр. 533.

② 一九六七・一二、世界思想社刊、猪木正道著『新版ロシア革命史』一七六頁

されば軍隊運動を利用しながらも軍隊内の分裂が、Тенизмの狙いである。単なる人民蜂起ではエネルギー化せず、暴発のそれは軍隊の組織力の分裂である。これ北がレーニンに学んだ「逆手の戒嚴令」の槓杆である。

八 国際環境と革命原理

国際環境熾烈で革命を煽られたものにスペイン内戦がある。その場合政府側の一枚看板は「戒厳令」であった。人民政府対国民政権であるが廟党の権を得たもの「戒厳令」に訴えるのである。1936 七月一七日スペイン領モロッコで人民戦線政府に反対する軍部の叛乱が起き本土でやがて軍部のクー・デ・ター pronunciamiento の出来。軍部の運動は労働者の抵抗に遭って挫折。ドイツ、イタリーの援助を得てクー・デ・ター後二年半に及ぶ内戦となった。即ち1930代の性格が世界の一局に投影されたもの、これがスペイン革命である。

注

- ① 昭和五四・三、中央公論社刊、斎藤編『スペイン内戦の研究』四五頁
② Edward Conze, Spain today, Revolution and Counter-revolution, Martin Secker and Warburg Ltd, 1936, p. 109.

コミンターン対国際フワシズム陣営の対立、土俵をイベリア半島に借りた独伊とソ連との対決である。そこで思想と情熱は半島に溢れてインテリ、文化人の対決でもあったその意味で *Kultur Kampf* である。

「革命を輸出する」の言がある。1789以来のフランス革命は正にそうであるがスペインの場合は輸入せられた革命である。フランコ叛乱軍にはモロッコの一角で烽火を挙げ、その内在的 *Raison d'être* はあったが本質的には人民戦線対フワシズム戦線である。かるが故に「文化闘争」の相があったのである。フランス革命来のイデオロギーにヘルダーやヴィーランドが登場するように輸出輸入の関係は浪漫的に彩られる所以である。

注

① Jean Jaures, Histoire socialiste de la Révolution Française V, Éditions de la Librairie d'Humanité, 1923, p. 98.

それはヘミングウェイの『誰が為に鐘は鳴る』、アンドレ・マルローの『希望』、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』、アーサー・ケストラーの『スペインの遺書』、ジョルジュ・ベルナースの『月下の大墓地』、ベルマン、ケステンの『ゲルニカの子供達』の英独仏の文学作品、ピカソの『ゲルニカ』となって現われている。ドイツの文芸思潮 *die neue Sachlichkeit* を地で行ったものである。がその裏は②「現代の殺戮兵器の実験場」「宗教戦争」の相を為した。

注

① 一九八一・二、れんが書房新社刊、ギブス著、川成訳『スペイン戦争』二一八頁

② 同

とまれ詠嘆的にスペイン戦場を懐古するには余りに様相は苛酷である。上からの「戒厳令」、下からの「革命衝き上げ」と三つ巴の混戦で、陣内戦が正規の戦闘より蜂の巣を突いた様に残酷であるように救い様のないものであった。

九 戒厳令手段として二・二六事件の場合に見る矛盾

昭和二年の二・二六事件の場合北一輝の「戒厳令」革命原理を信奉し乍ら、青年将校運動は「戒厳令」設定に短①

落しなかった。叛乱は「戒嚴」に主意があるのでなく戒嚴部隊に編入されることに在った。しかし法理上、又、政治的手段として「戒嚴」が手取早いことは理の当然である。然る上戒嚴令下の特設軍法會議で北が処断されたこと而も首魁にデッチ上げられたこと運命の皮肉である。

注

① 一九六七・三、柏書房刊、大谷敬二郎著『二・二六事件の謎』一三頁

② 同、二六八頁

二、二六事件では「特設陸軍軍法會議」と銘打たれた。軍人と民間人の属人主義を適用せず裁判管轄権のこの大処断は法律的にも政治的にも検討を要する。これは緊急勅令に仍つて特設されたが二月二十九日に早や「陸密第二四〇号事件関係者ノ摘発並ニ捜査ニ関スル伝達」とし「極秘、事変処理要綱、昭和十一年二月二十九日陸軍省」と掲げられている。

注

① 一九七八・二、岩波書店刊、大江志之夫著『戒嚴令』一八一頁

右の参考文献であるが大江氏のこの援用は的を射ているもので陸軍が明治憲法の緊急勅令に隠れてシャムニ処断した疑がある。この特設軍法會議は一審主義（上告は許されない）無弁護主義で嚴糾なること中世の検非遣使弾劾のそれに髣髴し凡そ近代の人権著意とは懸絶したものであった。北一輝はこれに嵌められたのである。抑北の主犯と云うのも疑念がある。吉田判士長の所見に由るに三月事件、一〇月事件でこの種不逞の行為に当局は不問に附し、北の行為は従犯の立場であることを認め、首魁デッチ上げを否定している。北は戒嚴令手段の軍法會議で自ら措上に乗っ

たのである。

注

① 一九六七・三、柏書房刊、大谷敬二郎著『二・二六事件の謎』二七三頁

今姑らく昭和九・一二、岩波書店刊、法律学辞典第一卷^①小野清一郎の解説に由るに管轄権はその會議法第五条に依り常人に及び、公判は特設に於いて、糾問主義、秘密主義の性格を帯びる。元來、統帥権沿由のものでないのに北等の宿命的な処断の所以である。

注

① 昭和九・一二、岩波書店刊、末弘田中編『法律学辞典第一卷』五五〇頁

この第五条は「帝国憲法」に違反の疑あるも況んや第八条緊急勅令に譲ったこと憲法第三二条に抵触しないか。

注

① 一九七八・二、岩波書店刊、大江志之夫著『戒嚴令』一九三頁

且つはそれは「常人」の優位を掲げ第五九条にも抵触する。要するに法治国家を紊る暗黒裁判である。北一輝の所在は警視庁が突き止めたに不拘敢えて憲兵隊に通報し憲兵の逮捕という手の込んだ擬装を執り軍法會議に送り込んだのであった。即ち陸軍としては何が何でも北西田を陸軍々人の身分を超越し処断の要があつたのである。この間の経緯には檢察官木内曾益、東京憲兵隊長坂本俊馬大佐、警視庁特高部長の安倍源基の密談工作あるべく北、西田の検挙となつたものである。

注

① 一九七八・二、岩波書店刊、大江志之夫著『戒嚴令』一九六頁

①陸軍刑法に由れば「軍人ニシテ内乱ノ罪ニ該ル行為其他内乱ニ値セザルモ所謂反乱ノ行為アル者ハ、常人にシテ同様ノ行為アル者ニ比スレバ、之ヲ重刑に科スル」ことを謳っている。これ軍人の身分の特殊性に基くもので常人北を屠ること明瞭に適用を誤るものである。司法部の明確な法律判断なきが如く軍部に屈従するものである。

注

④ 一九七八・二、岩波書店刊、大江志之夫著『戒厳令』一九八頁

この思想は近代刑法以前で「武家諸法度」それより遡って「御成敗式目」の武家刑法のそれに遡及するもので陸軍を支配した尚古主義である。

一〇 現行憲法の欠陥、戒厳令の欠除

平和憲法だから「戒厳令」は果して不要か？ *martial law* は民主国にも存している。明治憲法の如く「戒厳」を要件、効果は委任立法に委ねる如きも天皇大権に保留して任意に発動するはともかく非常事態に処するには自づから道があるであろう。それは現行警察法第七一条以下の若干の明文があるが不完全な警察行動の統制に過ぎない。それは「布告」「統制」「指揮・命令」を内容とし概括を規定しているがリミットは「警察行動」で軍隊の政治的には無制限の破壊行為ではない。 *Revolution coup d'état* が下からの「暴力」であるなれば「戒厳」は確に上からの「暴力」である。それならば自衛隊の場合如何かと云うに自衛隊法第七八条が間接侵略に処する治安出動、これは命令に依る場合、要請に依る場合には第八一条、旧時代の戒厳法規に髣髴している。第七九条は治安出動の待機命令前条の除外

例である。これで疾風迅雷の処置が可能であるか、突止であるが、云うところは第七八条は警察法第七一条への応答であるからである。これが擬似戒嚴令への引き鉄となるのであるが国家公安委員会勧告の歯止めがあり総理大臣の専決へのチェックになっている点、慎重の様で臨機のものではない。その戦術行動は自衛隊法第八九条の制限を受け、自衛隊法第七八条の行動は警察官職務執行法の準用を妥当とされる。ここでは軍隊の機動隊への格下げで戦術行動とは云い難い。その兵器使用は第八九条、九〇条の制限を受け「小火器」を前提とし自衛隊本来の火器には当たらない。つまり装備の格段の相違を無視している。即ち自衛隊の兵器使用の場合は「間合い」を執ることを前提としているのでなければ叶わない。第七八条命令に依る治安出動と第八一条要請に依る治安出動には部隊行動に逕庭あるべく後者の方が「戒嚴」的色彩は薄い。これは警察行動に後詰めの役割りにしか過ぎないものと目せられる。しかしその効果は絶大な装備、兵器使用に依って大鉦が振われる。危険視される所以である。抑、有事の際は「防衛出動」と「治安出動」と競合することあるべく「複合出動」になりかねない。第九〇条が抱括的治安に対処しているのはこれインテリに依って危険視されているのはこの「複合出動」とに仍り、往時の衛戍勤務会を超える事のあるやについてである。

注

① 一九七八・二、岩波書店刊、大江志之夫著『戒嚴令』二〇五頁

ともあれ治安出動の「戒嚴令」紛いの処置は第九〇条第二項の如くときに「牙」を藏するものも全体的に不揃いである。にも不拘その「あがき」は「三つ矢研究」こと昭和三八度統合防衛図上研究であって統合幕僚会議以下陸海空幕僚監部の総合演習である。これ法制的に現行憲法の枠内で許されることか。これは Gesetzgebung か行政の責任者

の非常の場合の「違法性の阻却」かの Entweder-Oder を措定するの法哲学上の命題であるが自由主義的な一般論からの negativ 傾向には私は再考の要があると思う。

最近に於ける「情報化社会」の騷々乎はとくにテレビの独占についてクー・デ・ターの成就の可能性を訴えるものがある。洵にその通りだと思ふ。ナチスは「ラジオ」の独占で Deutschland über alles^① を煽った。これがテレビのマス・メディアを介して禍害怖るべきものがある。謂うならく人は痴呆に委され思考能力を失うからである。「戒厳」は楯の両面である。それは^① Nemesis of power に支配されるものである。それは「秩序」の恒常性に訴うる者の Achilles Heels に戦く相である。

注

① John W. Wheeler-Bennett, The Nemesis of power, Macmillan & Co. Ltd., 1964, p. 289.